令和五年（二〇二三）三月二十五日発行
『大倉山論集』　第六十九輯抜刷
（公益財団法人　大倉精神文化研究所）

鉄道王・教育者の五島慶太を通してみる「人と人生」

重永睦夫

鉄道王・教育者の五島慶太を通してみる「人と人生」

重永睦夫

目次

はじめに
一　延命会
二　目利き五島慶太が救った肖像画・方広寺（静岡県浜松市奥山）のこと
三　書家としての五島慶太
四　五島美術館・五島慶太の愛したピアノ
五　文化人や芸術家との交友
六　五島慶太と学校
七　五島慶太のおいたち
八　五島慶太の胆力が試された事件
九　東横学園の創立
一〇　五島慶太は没後どのように評価されたか
おわりに

はじめに

「世界が寂しくなりました」…この言葉は、五島慶太が没したときに寄せられた弔電にあった言葉です。五島慶太がいかような存在であったかを偲ばせてくれます。五島慶太は今日の東急グループを一代で築き上げた立志伝中の実業家ですが、明治十五年（一八八二）に信州長野県青木村という山深い里の農家の次男坊として生まれています。豊かな自然を謳歌した少年時代でした。幼少から英才を発揮し、長野県内に当時一つしかなかった中学校に村内から一人だけ進学し「末は博士か大臣か」と嘱望されました。苦学して東京高等師範、東京帝国大学に進み、当時の農商務省や鉄道院に奉職しますが、官吏の生活にあきたらず、私鉄事業の道に踏み出しました。しかし順調とは縁遠く、愛妻の死、トンネル崩落や関東大地震による線路崩壊など難事に幾度となく遭遇します。後に東急グループを築き上げることが想像もできない事業家としてのスタートでした。慶太は、うち続く難事を、持ち前の情熱と誠実さによって乗り越えることができたのですが、事業で得た財を惜しみなく教育と文化に注ぎ込みました。慶太が教育と文化の事業に手を染めたことは、慶太の人生を語るときに欠かすことができないというのが筆者の考えです。五島慶太の鉄道・都市開発をはじめ東急グループの事業は広く知られているところです。ところが、その慶太が教養人、文化人、教育者として秀でており、また家族愛の人であったというようなことはあまねく知られていないように思います。そこで、本稿においては、慶太の事業家以外の側面に光をあてることから始め、多くのページをそれに割きながら、「慶太の人と人生」を語りたいと思います。

なお、本稿を執筆している二〇二二年（令和四）は鉄道敷設百五十年、学制発布百五十年の記念すべき年であり、

慶太はその両方にかかわっております。感慨深く筆をすすめてまいろうと思っております。

※　本文でふれている多くのことは、東京都市大学グループ各校の児童生徒学生に配布されている『五島慶太伝』に収録していることをお断りしておきます。同書は、学校法人五島育英会「五島慶太翁生誕一三〇年記念誌編纂委員会」編集、執筆したのは重永です。非売品であることも合わせて記しておきます。

一　延命会

まずご紹介したいのは、「延命会」[1]という茶人（数寄者）の会のことです。昭和十四年（一九三九）、当時の財界人によって作られた茶の湯の会です。集ったのは十五人と少ない人々でしたが、どの御仁も茶の湯に長けているだけでなく、茶道具はもとより骨董美術の相当の目利きであったようです。この会に慶太を誘ったのは小林一三。阪急電鉄や宝塚劇場を創設した人物です。後に西の小林一三、東の五島慶太と並び立てて呼んでもらうこともありました。一三は慶太より十歳ほど年長ですので、茶の湯にしても骨董美術への造詣にしても慶太より一日の長がありました。一三は慶太より二年半早く鬼籍に入りましたが、晩年、慶太に宛てて「あとの鳥が先になり口惜しき次第に候」という手紙を送っています。自分が誘い導いてきた骨董美術の収集において慶太に追い抜かれたという感想でした。実際に、慶太は古写経の収集では当代随一と言われました。慶太の晩年、大宅壮一（評論家）と有吉佐和子（作家）との座談会で慶太は「延命会」のことについて触れています。「将来に生命は延長できないが、過去にはいくらでも延長できる、聖徳太子の書かれた本を読めば千三百年前の聖徳太子と友達になれる、生命を千三百年延長したことになる」と話しています。これが延命会の名称の由来です。慶太は延命会でのひとときに心の安寧、教養修養の両方を感じていたこ

とは間違いありません。

二　目利き五島慶太が救った肖像画・方広寺（静岡県浜松市奥山）のこと

慶太の没後、『五島慶太の追想』（五島慶太伝記追想録編集委員会、一九六〇年）という著作がものされています。慶太の生前をさまざまなエピソードで綴り故人に哀悼をささげたものですが、各界各層から追悼文が寄せられたため大部の著作となっています。序文を書いたのは唐沢俊樹です。唐沢は慶太と同じ信州出身で、慶太より九歳若い。郵政大臣などをつとめた政治家で、同郷のよしみから慶太と昵懇の間柄でした。その唐沢が「ある美術鑑定家が五島さんの蒐集品には贋物が少ない、と言ったそうだ」と書いています。そしてすぐ後ろで「五島さんのような、大ざっぱで忙しい人に美術の鑑識眼などあるはずがない」と断定しているのですが、私は、慶太は美術商や骨董商との付き合いのなかで、相当の鑑識眼をつけたことは間違いないと思っています。

京都に方広寺というお寺があります。慶長十九年（一六一四）、徳川家が豊臣家を滅ぼす契機としたことで歴史の教科書にも載っています。同寺の鐘に彫られた銘文に「国家安康」「君臣豊楽」とあるのが、家康を切り刻み、豊臣が君主として栄えよという意味にちがいないと因縁をつけたのが徳川家康で、これを理由に大坂冬の陣に引きずり込まれて滅亡したのが豊臣秀頼です。実は、その方広寺とまったく同名のお寺が、静岡県浜松市北区奥山にあります。京都の方広寺が天台宗、浜松市奥山の方広寺は臨済宗。由緒のふかさでも伽藍のかまえでも甲乙つけがたい寺です。ここに特筆したいのは、浜松市奥山の方広寺です。というのは、慶太が書画骨董の目利きであることを語ることのできる重要な舞台だからです。戦時中、奥山・方広寺の寺宝である開祖画像が盗まれました。戦時中ですから、浜松市

にも東京・横浜から空襲をさけて疎開した人が多くいました。多くの疎開者は慣れない土地でも善良に過ごしていたわけですが、中に魔が差した人がいたわけですね。方広寺は寺宝の盗難に大変な騒ぎとなりましたが、あるとき、慶太が東京銀座の骨董屋で見つけました。即座に買い求めて同寺に返還し、たいそう喜ばれたそうです。慶太が骨董の目利きであったことを示すエピソードです。（『五島慶太の追想』五〇六頁、静岡鉄道川井健太郎社長（当時）の追想記）

三　書家としての五島慶太

慶太は書家として、多くの作品を残しています。後述しますが、慶太は東京都市大学グループの祖です。そのため各校に慶太の書が残されていて、いずれも名筆です。たとえば、東京都市大学塩尻高校の校長室に「慎其獨」が飾られています。「そのひとりをつつしむ」と読み、「優れた人は、どんな環境においても、もってうまれた性質が、立ち居振るまいにあらわれる。すなわち君子は独りきりでいるときも慎み深い」という意味です。また、慶太は、東急電鉄の青年社員の寮を「慎獨寮」と名づけています。慶太がいかに大事にした言葉であるか分かってもらえるでしょう。

聖徳太子の憲法十七条「以和為貴」も慶太は揮毫して、創設当時の東急グループ各社に掲示したといいます。

慶太は第二次世界大戦がはじまる前後に、当時の東京教育大学西川寧という教授に書を習いはじめました。戦争も末期、自宅で西川教授から書を習っているところへ空襲警報が鳴り響いても、手習が大事だとすぐには避難しなかったといいます。戊辰戦争のとき、上野の森から銃砲の音が聞こえている中、福沢諭吉が、いくさより学問の方が重要だとして、講読を続けたエピソードをしのばせる話です。

この西川教授に慶太は「西川先生は筆をとった瞬間、ピタリと書になりきれる修業を積んでおられるが、われわれにはそれが全然駄目ですな。」と話したといいます。慶太がそう語る名師匠西川教授は慶太に「古経楼」という斎号を送り、慶太は「古経楼」という茶室を五島美術館に残しています。

では次に、五島美術館について述べてまいります。

四　五島美術館・五島慶太の愛したピアノ

慶太は収集した美術品を五島美術館に収蔵し一般に公開しました。

慶太は、第二次世界大戦で次男進の戦死の知らせを受けました。進は慶太に我が身の写し鏡だというほど似ていたこともあって大変かわいがった子でした。その進を戦死というかたちで亡くした悲しみから、事業のすべてをなげうって仏門に帰依し、それまでに集めた古写経を一つ屋根にまとめ、経典に囲まれて進や故き妻、娘を弔う余生を送ろうと考えたといいます。立ち直って、事業を放棄する道ではなく再び活力ある事業家人生に戻ったのですが、古写経だけでなく収集した美術・骨董品を一般公開することへ踏み出しました。

五島美術館は、世田谷区上野毛の自宅敷地を割いて建てられました。

国宝の「源氏物語絵巻」「紫式部日記絵巻五島本」の収蔵で知られていますが、ほかにも国宝・重要文化財も多数おさめられています。慶太が晩年、重要文化財の「鼠志野茶碗・銘峯紅葉」を手にして相好をくずす【写真1】は、私ども都市大グループにかかわる者の中ではつとに有名です。

五島美術館を激賞しているウェブサイトがあります。飛騨の窯元の方ですが、次のようなことを言っておられます。

……美術展の展示物には他からの借り物もあるわけだが、「目垢が付く」（自分の物が他人に見られると汚れる）と言って絶対に貸し出さない人がいるのに対して、五島美術館は貸し出しまくる。こういう美術館を創った五島慶太という人をとても尊敬する…このような褒め方をされて慶太は草葉の陰で照れているかもしれません。（注記：五島美術館が今も同じ方針なのかは確認していません。）

実は慶太は、五島美術館の完成をみることなく鬼籍に入ったのですが、そのコレクションは五千点にものぼると言われています。慶太は、美術館建築を吉田五十八（いそや）に依頼し、吉田は五島コレクションの「国宝源氏物語絵巻」にちなんで寝殿造りを取り入れたといいます。国分寺崖線の末端である上野毛の丘陵、その稜線を生かした庭園は、自然そのままに仏像などが置いてあったり茶室も二つしつらえてあったり（古経楼・冨士見亭）、慶太が風流人、文化人であったことをしのばせています。東急大井町線上野毛駅から徒歩五分ほど閑静な住宅街のなかにあります。

五島美術館に収蔵されてはいませんが、慶太コレクションのうち、特筆しておきたいものがあります。

「五島慶太が愛したピアノ」と称されているもので、ＹＡＭＡＨＡが昭和三年（一九二八）に製造しているものです。当時、全国各地のピアノメーカーが、「我こそは世界に誇るピアノを作らん」と意気込んでいた雰囲気のなかで制作されたものだそうで、六本の脚、ペダルも二本という珍品で、彫刻もあしらわれていて初代の所有者が五島慶太でした。最近まで、長野県南信地区のホテルが所蔵し写真もホームページで公開していたのですが、いまは手放してし

【写真１】五島慶太と茶碗
（写真提供：東急㈱）

まったということです。個人情報保護の関係からなのか行方が明かされないでいることは大変残念なことですが、五島慶太の趣味の広さを示すものとしてここに記した次第です。

五　文化人や芸術家との交友

それでは慶太が多くの文化人や芸術家と交友を深めたことについて述べ、慶太がいかに懐のふかい事業家であったかを示したいと思います。

（一）茶人との交友

五島美術館には、庭園に茶室が二つ（古経楼・冨士見亭）しつらえられていることは前述しましたが、慶太は、表千家第十三代家元千宗佐（即中齋）、裏千家第十四代家元千宗室（無限斎）という方々とも親しくお付き合いしています。お二人とも『五島慶太の追想』に寄せて、慶太と心のふれあいが深かったことを記しています。千宗佐は昭和三十二年（一九五七）ごろ開いた初釜に五、六十人を招いていますが、正客は慶太でした。また第十四代千宗室は、慶太のことを「私の敬慕する翁」と呼んでいます。

そんな慶太ですから、東京都台東区の浅草寺に茶室を寄贈していることを紹介しても、誰も不思議がる人はいないでしょう。浅草寺本坊伝法院庭園に茶室「天祐庵」があります。慶太が寄贈したものです。天祐庵は、はじめ江戸時代後期、京都表千家「不審庵」の写しとして名古屋に造営されたものです。大正五年（一九一六）茶人高橋箒庵に譲渡されたものを昭和三十三年（一九五八）に慶太が譲り受け伝法院に寄贈しました。慶太他界の一年前のことです。

五島美術館の茶室については既にのべた通りですが、それらは、慶太が創立した学校（東横学園／いまの東京都市大学等々力中高校）の茶道部の生徒がお点前で使っています。

（二）棟方志功のこと

慶太が書家であったことはすでに触れましたが、絵画や陶芸にも強い思いを寄せていました。河井寛次郎という陶芸家がいます。柳宗悦とともに民藝運動にかかわった人だと言えば、なるほどと相槌を打ってもらえるでしょうか。慶太はこの河井寛次郎と交友を深めていたことで、後世に大いに名を高めることになる人物と知り合います。

河井寛次郎に紹介され、慶太が生涯つきあうことになった無名の画家とは、のちに日本を代表する版画家となる棟方志功です。河井寛次郎は慶太より十歳ほど若く、棟方はさらに一まわり若いので、慶太と棟方志功は二十歳の年齢差がありましたけれども、慶太は無名の棟方を大いに支援しました。そういう関係から、棟方志功は、慶太が鬼籍に入ったとき、六百ページを超える追悼集『五島慶太の追想』の表装を引きうけています。そればかりか、追想集編集部のインタビューに答えていわく「五島さんの印象ですか？まず大きいということですね。それも人の意表に出るという大きさではなく、どんな場合でも、はかりきれないほどの大きさ、という感じですね。」「冗談をおっしゃるにしても、ユーモアの中に必ず本当のこと―真理をついておりましたね。」と慶太の人柄をなつかしんでいます。棟方を慶太に紹介した河井寛次郎も同書のなかで、「（五島慶太会長に）棟方志功が無名の時に紹介したが、その気魄と素っ裸な人間性を見抜かれた。」と記しています（『五島慶太の追想』五〇三頁）。

（三）横山大観のこと

以上のように、『五島慶太の追想』は、慶太の交友の広さと深さを教えてくれます。ぜひとも手に取って一読してほしい書籍ですが、非売品ゆえに一般には容易に手に入らないところがもどかしくあります。さて、慶太の交友について、もう少し紹介しておきたい人がいますので、筆をすすめます。

横山大観は近代日本を代表する画家ですが、大観と慶太は、会えば酒を酌み交わした仲だったそうです。大観は慶太より一年半はやく鬼籍に入っていますので、『五島慶太の追想』に大観の文章が載っていません。こんな言い方が許されるかどうか、誠に残念な思いもします。慶太が大観よりはやく旅立っていたら大観を弔えなかったわけですからね。やっぱり順番だったというほかはありません。それはともかく、大観の生前、大観の名画を収集したコレクターでは慶太が一番であり、今も五島美術館に大観の名作は多く収蔵されています。

（四）吉川英治のこと

『三国志』や『宮本武蔵』『私本太平記』『新・平家物語』など大作をあらわした吉川英治もまた、慶太が親しく交わった人です。戦時中、吉川英治は奥多摩に疎開していたのですが、慶太は何のまえぶれもなく訪ねたといいます。慶太の方が十歳年長ですので弟をかわいがるようなつもりでいたのでしょう。床の間の掛け軸をながめて、「これはいい。君は知ってをらんだろうが、安田善次郎さんのところにあった五行だよ」と、ここでも目利きぶりを発揮したそうです（『五島慶太の追想』三八二頁、吉川英治）。また吉川英治は追想のなかで、慶太の人柄をひとくさり綴ったあと、慶太のことを「カントの言う『真の男性像』というものだ」と褒めています。近代日本の大作家が、近代世界の大哲学者の名前を引いて褒めるのですから、わたし如きが言うのも僭越なことと承知はしておりますが、慶太も人生冥利

に尽きるのではないでしょうか。

ところで三題噺(さんだいばなし)(2)めいたことになるので恐縮ですが、吉川英治の『私本太平記』は、慶太と談論風発するなかで構想が湧いてきたのではないかと私は想像をかきたてられます。『私本太平記』は、昭和三十三年（一九五八）一月、毎日新聞で連載が始まりました。足利尊氏を描いています。尊氏は戦前、後醍醐天皇に背いた逆賊と教えられた人物です。慶太は小学生のころ（明治二十年代）、歴史の授業で、先生に次のような質問をしています。「足利尊氏は不忠者とはいえ日本中の武士を従えて室町幕府を開いたのですから、尊氏にもどこか良いところ、優れたところがあったのではないでしょうか。」その優れたところを教えてほしいというわけです。慶太の質問をうけた先生の困った顔が目に浮かびます。幼き日のこのエピソードを慶太は昭和三十一年か三十二年、当時の東横学園小学校（現 東京都市大学付属小学校）の小島忠治校長に話しています。それは慶太逝去の数年前のことですから大変貴重な回顧談となりました。そして、その一、二年後に『私本太平記』の連載が始まっているわけです。読者の皆様は吉川英治ほどの大作家が、五島慶太が大事業家とはいえ、文学の素人の話にヒントを得て歴史にのこる小説を着想するものかとお怒りになるかもしれません。ですが、慶太と吉川英治の仲を考えれば、歴史談義に興ずるうち、ついつい、そういえば自分の小学生時代に、こんな質問をしたことがあるんだよと慶太が軽口をたたき、英治がそれは歴史小説のテーマになりますなと返したのではないかと勝手な想像が頭をめぐるのです。読者の皆様のご寛恕をお願いします。

（五）有吉佐和子のこと

先に「延命会」のことを記したときに、慶太が大宅壮一・有吉佐和子と座談会に応じたことに触れました。

有吉佐和子は慶太とは祖父孫ほど歳がはなれています。老年の慶太は年若い子とは対談や座談はしないと広言していたそうです。ところが、週刊誌編集者の口説きで、対談に引っ張り出されたことがあって、それ以後、「あの子ならいつでも会おう」と言うようになったといいます。それであちこちの編集部が慶太と佐和子の対談を企画するようになり、あるときなどは慶太は佐和子と顔を合わせたとたん「…嫌われたのかと思ったが、よく来てくれたねえ」と言ったこともあるそうです。佐和子は「強盗慶太と自らも称していた会長の、人もめったに見ない半面だと思い、私は面白かった」と懐かしんでいます。蛇足ですが、後年、有吉佐和子はベストセラー「恍惚の人」を書きましたが、そのモデルは慶太ではありません。慶太は恍惚の人になることなく昇天していますから。

（六）映画スターとの交友

五島慶太が映画会社を創っていたと知ったら、たいていの人はびっくりすることでしょう。また、昭和三十年代四十年代の映画ファンなら片岡千恵蔵とか市川歌右衛門という名前を知らない人はいないと思いますが、これら稀代の映画スターが慶太を心から慕っていたと聞いたら、ひっくり返るのではないでしょうか。慶太は「東横映画株式会社」を昭和十三年（一九三八）に創って社長となっています。戦後、東横映画は大映と連携するなどした後、昭和二十六年（一九五一）、東京映画ほかと合併して「東映」となりました。銀幕のスターたちから、慶太はオヤジと呼ばれて慕われました。多くの俳優が『五島慶太の追想』に寄稿しています。市川歌右衛門は「男で慶太、女はひばり」という惚れ込みようでした。また、歌舞伎の二代目市川猿之助は「五島さんは人を摑（つか）んでしまう方で、こちらも甘えたく

てしようがない気持ちにさせられてしまう」と言っています。甘えたくなるような人物はそうざらにはいないでしょう。このような慕われ方をしたことを裏付けるように、ある銀行マンの言葉が胸にしみます。「五島さんの人間性にジカにふれる機会を持ったが、五島さんにお会いしていると、いつか、私までが人間的に磨かれ、清められていくような気がしてならなかった」（『五島慶太の追想』三〇三頁、安済良一住友銀行常務）。

六　五島慶太と学校

以上、慶太を、風流人、教養人、文化人という側面から綴ってきましたが、次に、「慶太と学校」というテーマで筆を進めたいと思います。

慶太は、西の鉄道王と呼ばれた小林一三（阪急の創始者）のことを、あらゆる面で己が師範、手本として仰ぎ見ていました。次のように語ったことがあります。自分が小林さんより上をいくところがあるとすれば、それは一つ、鉄道沿線に学校を誘致したということだと。このような述懐が出てくるほど、慶太にとって、「学校」というのは極めて重要なテーマでした。口さがないというか、鉄道に学校をひっぱってくるのは別に教育のためではなくて、学生に鉄道料金を払わせて儲けようということさと言う人もいますが、本章を読めば、「慶太と学校」というのは、その程度のことではないことが分かってもらえると思います。

「慶太と学校」というテーマは、三つに分類できます。一は、「沿線に誘致した学校」。二は、「経営や設立支援を依頼された学校」。三は、「自ら創設した学校」。このように分類できることを知るだけで、おや?と奥の深さを感じてもらえるのではないでしょうか。順に筆を進めます。

（一）五島慶太が東急沿線に誘致した学校群　十校

慶太が沿線に誘致した学校は、なんと十校にも上ります。列挙します。

❶ 大正十二年（一九二三）東京工業大学・大井町線
❷ 大正十二年（一九二三）小山台高等学校・目黒線
❸ 大正十二年（一九二三）攻玉社・目黒線
❹ 昭和四年（一九二九）慶応義塾大学日吉キャンパス・東横線
❺ 昭和七年（一九三二）東京都立大学（二〇〇五年～二〇一九年は首都大学東京と呼称）・東横線
❻ 昭和七年（一九三二）日本医科大学予科と病院・東横線
❼ 昭和十年（一九三五）東京学芸大学・東横線
❽ 昭和十年（一九三五）多摩美術大学・大井町線
❾ 昭和十年（一九三五）法政大学予科（今の法政大学第二高校）・東横線
❿ 昭和十四年（一九三九）武蔵工業大学（今の東京都市大学）・大井町線

学校を誘致するためには駅に近い至便のところに敷地を用意する必要がありますので、これだけの数の学校を誘致するというのは並大抵のことではありません。住宅地や商業地とのバランスを整えるとき大変な困難があっただろうことがしのばれます。以上のうち、❹の慶應義塾大学日吉キャンパスのことについて、大倉精神文化研究所の平井誠二所長と林宏美さんが書かれたものがありますので、そちらを引用したいと思います。紙幅の関係からご紹介は要約とさせていただきます。また原文は「ですます調」ですが、「である調」に変えました。

慶應義塾大学は、関東大震災復旧のなかで、一部移転を計画したところ、（五島慶太の）東京横浜電鉄と目黒

蒲田電鉄が、日吉台の土地二十三万七千六百㎡を無償で寄付し、さらに十万五千六百㎡の土地の買収を斡旋するという破格の条件を提示した。小田原急行電鉄や箱根土地株式会社なども名乗り出たが、昭和四年（一九二九）、慶應義塾大学の予科、普通部、商工学校、寄宿舎などの日吉移転が決まった。借用地も含め実測で約四十三万㎡の大キャンパスである。『東京急行電鉄五〇年史』によると、この頃の地価は一坪（三・三㎡）＝十円だから、七十二万円の寄付になる。当時の年間運賃収入五十一万円をはるかに超えた寄付というわけである。（別の資料には坪七円とか五円との記述もあるが未確認）。日吉周辺の分譲地の地価は二・五倍に高騰し、年間の契約面積は八・四倍に急増した。

慶應義塾予科が日吉に移転開校した昭和九年（一九三四）は、奇しくも福沢諭吉（一八三四～一九〇一）の生誕百年にあたり、十一月に「福澤先生誕生百年並日吉開校記念祝賀会」が行われ、延べ二万五千人が来校した。そして、日吉キャンパスには、昭和十四年（一九三九）藤原工業大学が設立された。創設者の藤原銀次郎は、義塾の出身で、旧王子製紙の経営者となった人物で、後に政治家にもなる。この藤原工業大学が慶應義塾大学工学部の前身である[3]。

ここに、藤原銀次郎の名前が出てきますが、彼と五島慶太との交流については後ほど記します。

（二）慶太が経営や設立支援を依頼された学校群　五校

以上にみたように慶太が学校の誘致に並々ならぬ情熱を傾けたことが世間に広く知られると、学校経営に苦しんでいる私立学校や学校を創りたいけれども資金繰りに苦しんでいる人たちから、支援依頼が舞い込むようになります。慶太はいずれも二つ返事で引き受けました。これも列挙します。年代順不同の理由は後述します。

❶ 昭和三十三年（一九五八）信州電波専門学校（いまの東京都市大学塩尻高校）
❷ 昭和三十四年（一九五九）国立北見工業大学（いまの北見工業大学）
❸ 昭和三十年（一九五五）武蔵工業大学（いまの東京都市大学）
❹ 昭和三十年（一九五五）大倉山学園大倉山女子高校（のちの東横学園大倉山高校）
❺ 昭和三十年（一九五五）玉川正和行学園（いまの東京都市大学付属小学校と東京都市大学付属中学校・高等学校）
❻ 昭和三十一年（一九五六）亜細亜大学

年代順不同をかえりみず❶と❷を最初にもってきたのは、この二校は、慶太の死が半年あるいは一年早かったら、支援を受けることができず、当時慶太に替わる支援者を見つけることは困難であったことを考え合わせれば、存続や開校が叶わず、現在存続していないという事情があるからです。この両校にとって「慶太の死」のタイミングは奇跡と呼ぶべきほどのものなのです。両校とも慶太の恩に報いるために慶太の胸像を敷地に飾っています。それにしても、❷の北見工業大学は国立大学法人であるのに、どうして民間人の五島慶太の支援を仰ぎ、今にいたるまで胸像をもって顕彰しているのでしょうか（ちなみに「五島慶太」という名を揮毫したのは吉田茂元首相）。戦後、道東に国立大学を誘致するのは北海道の悲願でした。それにこたえて北見市長が積極的に文部省に働きかけていました。文部省は、自前で大学設置費を用意できることを条件として提示したところ、北見市あげての募金活動となりました。しかし七千万円しか集められず、一億円が不足してそのままでは国立大学誘致は不可能でした。そのとき市長の頭に浮かんだのが教育に情熱を注ぐ五島慶太でした。慶太は一億という巨額に即座に首を縦にふりました。そして一年もたたず逝去したのでした。ですから開学式典のときには存命していませんでした。国立大学でありながら私学人の五島慶太胸

像を設置しているのは故あることなのです。

❸の武蔵工業大学は慶太が沿線に誘致した大学にも名を連ねていますが、結局、経営に苦しみ、慶太を頼ってきました。慶太は理事長を引き受ける評議員会で教授から、校舎が雨漏りして困る、三百万円で新しい校舎を建ててもらえないかと相談されたのに対して、私に頼むにしては一桁まちがっているのではないか、三千万円で鉄筋コンクリートの校舎を建てよう、十カ年計画で全てを鉄筋コンクリートの校舎にしようと、気宇壮大なことばで返答しました。有言実行、十年後にみごとに実現し、武蔵工業大学発展の礎を築きました。慶太は武蔵工業大学と東横学園を法人合併して学校法人五島育英会を創設し、自ら経営に当たりました。

❹の大倉山学園のことは本稿の結びの章で特別に語りたいと思います。

❺の玉川正和行学園は小学校と中学校は今の都市大付属ですが、幼児教育においては「正和学園」として、現在町田市において存続していることを注記しておきます。

❻の亜細亜大学は創立者の元文部大臣太田耕造が経営を五島慶太に依頼してきたものです。以来、亜細亜大学は現在に至るまで学校法人としては慶太の学校法人五島育英会から独立していますが、両法人とも東急グループの教育文化事業の一環に位置付けられています。

（三）慶太が自ら創設した学校

「慶太と学校」の三分類目は、「慶太自ら創設した学校」です。慶太が経営に携わることになった学校として、武蔵工業大学と亜細亜大学などがあることに触れましたが、これらは自ら創設した学校ではなく、経営に行き詰まった他者から頼まれて引き受けた学校、既存の学校です。

無から有を創り出した学校は一つです。

❶　昭和十二年（一九三七）東横商業女学校（東横学園）

東横商業女学校（東横学園）は現在の東京都市大学等々力中高等学校の祖です。慶太が東横商業女学校を創設するにいたったいきさつは、慶太の人生における一大事と重要なかかわりがあることですので、第八章にて独立させて語ることとします。

七　五島慶太のおいたち

以上、よく知られている事業家としてではなく、一般の人には意外に思われるかもしれない側面に光をあてて、慶太を描いてきました。ここから慶太のおいたちに移ります。ただ、実は与えられた紙幅がもう半分ほどしか残されていません。これまでのところを丁寧に読んでこられた読者からは、けっして一章から六章までが長すぎたとお叱りを受けることはないと信じますが、これから叙述する「慶太のおいたち」は、少々駆け足になります。ご理解願います。

（一）少年慶太を育んだ人々

五島慶太は、明治十五年（一八八二）四月十八日[4]にこの世に生をうけました。父を小林菊右衛門、母を小林寿ゑといいます。そう、慶太は生まれたとき「小林慶太」でした。後に結婚によって姓を五島と変えるのですが、単純な「婿入り」ではありません。それは後述します。信州で名うての教育家と呼ばれた手塚慶三郎の慶にあやかって「慶太」と名付けられました。生まれたところは、信州は長野県。小県（ちいさがた）郡青木村殿戸（とのと）という山里です。東に浅間山、西に北ア

ルプスの山々をのぞむ風光明媚なところです。すぐ近くに国宝松本城を擁する松本市がありますが、この青木村も小さな村とはいえ国宝があります。大法寺三重塔です。

慶太の両親は二人とも法華経の敬虔な信仰者で、お寺と神社のお参りを欠かしませんでした。長じて慶太が帰省したときも、慶太の姿に法華経を唱えてから（神仏に慶太の無事を感謝の意）、「おかえり」と声をかけたといいます。尊い両親に感化されて信心深い人生を送りました。東横学園を創ったときも、人間には知性合理性に加えて「宗教的情操」が必要だと説いています。

両親の躾があっても、ご多分にもれず慶太も小さいときはわんぱくで、村のおじさんに叱られたり、お巡りさんから諭されたりすることがありました。でも小学校にあがって勉強が始まると、英邁な資質を表すようになりました。明治五年（一八七二）の学制発布からしばらくは、中学校は長野県に一校だけでした。松本中学校（今の松本深志高等学校）です。上田など四つの支校（分校）があり一年から三年までは支校で学び、四年から松本中学校（本校）で二年間学ぶシステムでした。一つしかない中学校に青木村からは同学年では慶太が一人進学しただけでした。いまも慶太のかよった小学校には慶太の通知表が残されていて、ほとんどの科目で八十点以上の成績をおさめています。小学校の校長は小林直次郎といい、後に長野県会議員をつとめた人です。最初の担任は若林若次郎といい慶太と同じ殿戸地区に住んでいて慶太をたいそうかわいがってくれました。慶太は後年、両先生の顕彰碑を建てています。余談ですが、昔から若林若次郎のように苗字の最初の文字を名前の先頭につけると立派な人物になると言われていて、昭和の時代までは結構、目にする命名法でしたが、平成以降はほとんど見かけませんね。

慶太は松本中学校四年生になると松本市に下宿をしましたが、上田支校（今の上田高校）には自宅から通いました。もちろん徒歩通学です。片道三里、十二キロメートルの道のりです。昔の人の足腰がいくら頑健であると言っても片

道三時間を毎日通うのは至難のことです。慶太の通学袴がよく擦り切れるので、母親の寿ゑが、何をすればこうやって擦り切れるのか問いただしたことがありました。答えは、読書しながら歩いていると何かかにかに袴をひっかけるのだということでした。三里の道を通うだけでびっくりするのに、その距離を読書をするというのですから魂消ます。しかし慶太にとって学校以外には通学時間しか勉強時間がなかったという逸話でもあります。

慶太はこの中学校時代に「末は大臣になる」と志を立てます。後年、実際に運輸大臣になりました。

【写真２】松本中学校時代の肖像（写真提供：東急㈱）

【写真３】慶太の生家

【写真４】片道三里の山道

【写真５】旧制上田中学校の正門

（二）青年慶太の遅々たるも粘り強いあゆみ

慶太は「末は大臣」という志を立てたわけですから、早くから東京に出ることを夢見ていました。しかし、父の菊右衛門は、村一番の富農だったとはいえ、当時盛んになっていた製糸業に手を染めて失敗しお金に余裕はまったくない状況でしたから、学資を自分で工面しなければなりませんでした。そのため、中学校卒業後、青木村の代用教員をつとめて給料を貯めながら機会をうかがうことにしました。その後の慶太の履歴を箇条書きに致します。

❶ 明治三十三年（一九〇〇）　十八歳　松本中学校卒業（上田中の本校）
〃　青木村小学校代用教員
❷ 明治三十四年（一九〇一）　十九歳　東京高等商業学校（現一橋大学）不合格
❸ 明治三十五年（一九〇二）　二十歳　東京高等師範学校（現筑波大学）入学
❹ 明治三十九年（一九〇六）　二十四歳　三重県立四日市商業学校　英語教師赴任
〃　五月三十一日～六月半ばまで兵役（短期現役制度）
❺ 明治四十年（一九〇七）　二十五歳　東京帝国大学法科政治学科入学
❻ 明治四十四年（一九一一）　二十九歳　農商務省奉職。二年後、鉄道院へうつる。

それぞれに逸話がのこっていますが、紙幅の関係からここでは最小限の紹介に留めます。青木村の秀才も❷にあるように一度は不合格の憂き目をみています。❸の東京高等師範（現筑波大）では嘉納治五郎が校長でした。嘉納が柔道着姿で「修身」（倫理道徳の科目）の授業をしていて「なあに」という精神さえあれば乗り越えられない難事はないと毎回のように言っていたのが慶太の人生に大いに励みになりました。高等師範の卒業生は最低でも一年間、地方の教員をやることになっていたので、慶太は三重県に出かけます❹。わずか一年間の教壇でしたが大きな影響をのこ

し多くの生徒を感化し、それらの生徒は後年にいたるまで慶太を慕って人生の指南を受けました。その方々の慶太追悼座談会が『五島慶太の追想』に収録されています。ところで❹に「兵役（短期現役制度）」とあるのは、原則三年間の徴兵制度にあって、学校の教員は六ヶ月間兵役に服せばあとの期間を免除される規定があり、慶太はそれに応召されたということです。英語の教員だっただけに上官に重宝されたといいます。

以上のように代用教員、高等師範など苦学や遠回りした末に、❺東京帝国大学に入学しますが、同期の一年生のほとんどは、学校の階段を帝大までとんとん拍子にかけあがってきた人物ばかりでしたから、慶太が最も年長で年齢に四年も五年も開きがありました。でも、慶太は威張ることなく、晩年まで皆と刎頸（ふんけい）の交わりをしました[5]。

こうして、❻高等文官試験に合格して農商務省に奉職するころには慶太は数え年でもう三十を数えていました。そして数年後には、加藤高明のすすめで農商務省から鉄道院に移りました。この鉄道院への異動が慶太の人生の大きな転換点になることを慶太はどれだけ意識していたでしょうか。

（三）青年時代に薫陶をうけた恩人

以上、慶太の青年時代が決して順風満帆であったわけではないことがお分かりいただけたと思います。そしてまた、苦難の道を切り開くことができたのは決して己一人で出来たわけではありません。人は人に支えられて生きる習いのように慶太も多くの人に助けられて人生の荒海に乗り出すことができました。特筆すべき恩人は三人います。

❶　嘉納治五郎（東京高等師範学校校長、柔道家）

❷　富井政章（法学博士、貴族院議員）

❸　加藤高明（首相、外相）

錚々たる面々です。二十代の若者がどうやってこの方々の知己を得たのでしょうか。❶の嘉納治五郎については高等師範学校で「なあに」の精神を学んだことは先に述べた通りです。慶太は帝大入学後、四日市商業学校英語教師一年間で貯めた貯金が底をつきました。そのとき、まず頭に浮かんだのが恩師嘉納治五郎だったのです。校長に無心できるほどの間柄だったわけです。嘉納を訪ねると、❷の富井政章博士が息子の周（あきら）の家庭教師を探していると紹介してくれました。富井との面接に合格した慶太は学資の恩にこたえて、翌年、周を仙台の第二高校に合格させました。富井は引き続き学資の面倒をみると言ってくれたのですが、富井の家計がけっしてゆとりあるものではないことを察して辞退しました。大学の掲示板に「陸奥宗光奨学金」の募集があるのを見つけた慶太はそれに応募する旨、富井に伝えると、富井はその審査委員加藤高明に推薦状をしたためてくれました。❸の加藤高明は日英同盟の推進者、外務大臣として売り出し中の政治家です。富井の推薦状をもって加藤に会いにいくと加藤はひとめで慶太を気に入り、奨学金などもらわんでいい、息子の厚太郎の家庭教師をしてくれと言うのでした。このように奇遇が奇遇を呼んで慶太の学資問題は解決したわけですが、このように富井加藤という二人の大物に知己を得たことは慶太の人生にとってかけがえのない宝となったことは言うまでもありません。慶太は終生自宅にふたりの写真を掲額することを怠りませんでした。

ちなみに、富井政章（❷）は、民法の起草者で、立命館の初代校長・学長でもあります。やがて慶太は久米萬千代と結婚しますが、萬千代の紹介者ならびに媒酌人は富井政章夫妻です。❸の加藤高明がその後、総理大臣になりましたが、加藤は現職の首相として病没しました。訃報を慶太が承けたのは、東横線の高島トンネルが掘っているさなかに崩落した日でした。崩落現場で指揮をとっていた慶太はあとを部下に任せて恩人のもとにかけつけました。このとき、首相加藤高明の葬儀の裏方を一手に引き受けている男をみた伊沢多喜男（東京市長、劇作家飯沢匡（ただす）の父）が、そ

の男を五島慶太だと知って語った言葉は印象的です。「かくも首相とゆかりが深ければ党人の政治家に何やらかにやら渡りをつけそうなものなのに、それをしなかったのが五島慶太だ。大したヤツだ」（『五島慶太の追想』三四五頁）。似たような感想は、昭和後期を彩る宰相田中角栄も漏らしています。角栄は「オヤジこそ総裁にしてみたいとつくづく思いました」と言っています（『五島慶太の追想』二四七頁）。オヤジとは慶太のこと。総裁とは自民党総裁。つまり田中角栄は慶太を総理大臣にしたかったと言っているわけです。

（四）東京帝国大学卒業、久米萬千代と結婚。五島慶太となる。

帝大を卒業し高等文官として官吏の道を歩み始めた慶太は、富井政章夫人から久米萬千代（まちよ）との見合いを進められます。萬千代は、久米民之助博士（皇居二重橋設計者）の長女で、学習院女子部の才媛で皇后の御前で舞を披露したこともあるやんごとなき女性でした。そして弟の久米民十郎が当時上演されていたオペラになぞらえて「まるで美女と野獣だ」と漏らしたほどの見目麗（みめうるわ）しさでしたが、慶太と結婚することを迷いなく肯（がえん）じたというのですから、慶太、男冥利に尽きるというものです。ただ、久米博士が言うことに慶太は驚かされます。……実は萬千代は、二才のときに、戸籍上、五島惣兵衛という人の養女にやって五島姓をとらせている。萬千代の祖母（久米博士の母）の実家・五島家は上州沼田藩士の家柄だが、跡取り男子がいなくてお家断絶になっているのだよ。慶太君には萬千代といっしょに五島家に入り、五島家再興の夢を叶えてくれないだろうか…というのでした。慶太には郷里に長兄虎之助がいますから小林家の跡取りの心配はありません。富井博士夫妻を媒酌人として華燭の宴をひらき慶太は五島慶太となりました。慶太は後年まで「俺は養子じゃないよ」と言っていたということですが、それは以上の事情があるからです。

萬千代とは二女二男に恵まれたのですが、結婚十年を経た大正十一年（一九二二）、萬千代に先立たれることにな

りました。パンデミックは終わっていましたけれども、「スペイン風邪」をこじらせたようです。次女みちこも夭逝し、次男進は戦死しましたので、長女春子（代議士曾禰益に嫁ぐ）と長男昇（日本商工会議所会頭となる）が慶太晩年まで最愛のこどもとして残りました。慶太は後妻を迎えることもなく萬千代を終生の妻としています。いま二人は世田谷区奥沢、東急大井町線九品仏駅そばの浄真寺に並んで眠っています。

【写真６】結婚した慶太と萬千代（写真提供：東急㈱）

【写真７】萬千代なきあとの慶太と子供たち（写真提供：東急㈱）

（五）慶太が事業家として師事した人々

ここまでの叙述でも慶太の人生は公私ともに波乱万丈であったことが分かってもらえたと思いますが、このあとも波風の荒れるなかを生きていきます。慶太が事業家として立っていくうえで導きの星となった人物がいたことは言うまでもありません。ここでは次の人々をあげておきたいと思います。

❶　渋沢栄一　日本資本主義の父
❷　小林一三　阪急・宝塚・東宝の創業者。
❸　矢野恒太　第一生命保険の創業者

❶の渋沢栄一は、先年、「青天を衝け」の主人公としてＮＨＫ大河ドラマの顔となりました。令和六年（二〇二四）からは新一万円札の顔としても予定されています。誰知らぬものはいない日本資本主義の父です。東京の高級住宅地、田園調布の都市計画をした人物としてもよく知られています。実は田園調布の開発を構想したのは渋沢が喜寿を超えたころです。田園調布開発を実際にすすめる適役を矢野恒太（❸）、小林一三（❷）に託したのですが、矢野は還暦を迎える年齢、小林一三は壮年であっても大阪神戸を拠点に事業をしている関係から、最適役として五島慶太が推挙され渋沢栄一の眼鏡にかなったのでした。渋沢は江戸時代の生まれ、尊攘運動にたずさわったというほどの人で、慶太より四十二歳も年上、小林より三十三歳年長。慶太はあぶらの乗りきった壮年でした。天下の渋沢に頼まれた事業とあって胸を打ちふるわせて取り組んだことでしょう。渋沢のつくった田園都市株式会社は五島慶太が引継ぎ今の東急株式会社に連なります。

❷の小林一三は、事業においても文化・教養の面においても慶太の「師匠」的存在であったことについて、一章の「延命会」や六章「学校と慶太」のところでも叙述しました。ここでは、慶太と直接関係ないことですが、テニスの松岡修造さんの曽祖父であることだけ書き添えておきましょう。

❸矢野恒太は、慶太より十六歳年上で、三十六歳のときに第一生命保険を創業した稀代の実業家です。先ほど田園調布開発で渋沢に頼られた人物だと書きましたが、小林一三に慶太を紹介されて以来、慶太の手腕をかい、慶太が目蒲電鉄と東横電鉄の社長につくまでの間、両社の社長を引き受け育ててくれたのが矢野恒太でした。鉄道は既存の都

市を結ぶだけではなく、沿線に商業・文化都市を作る、また経済成長と人口増加を見通して新たな都市を開発するために鉄道を敷く。こうした手法は小林一三が関西でいちはやく取り入れていましたが、東京および近郊の急速な発展、関東大震災後の復興にあたって矢野・五島のコンビは見事な手腕を発揮しました。そのとき、学校群を誘致することの重要性に気が付いたのは慶太ならではのことでした（六章「学校と慶太」参照）。また、東急グループがいま、ベトナム・ビンズン省に田園都市を開発中ですが、矢野と慶太が草葉の陰で応援してくれていることでしょう。

ところで、矢野と慶太についてはもう一つご紹介しておかなければなりません。それは、「予算即決算」という経理原則についてです。慶太は早くから「予算即決算」という考えで事業を進めなければ結局「どんぶり勘定」に堕してしまうという信念を従業員に語ってきかせていました。いま「サクセスネット」のホームページには「予算即決算」は「慶太の発明」と掲載されています。このサクセスネットは、矢野恒太創業の第一生命保険の系列であることを考えるとむべなることかなです。

（六）「慶太と事業」異聞

藤原銀次郎は「王子製紙」を創業し製紙王と呼ばれた立志伝中の人物です。慶太が慶應義塾に無償提供した日吉キャンパスに藤原工業大学を創立し、ほどなくして、そっくりそのまま義塾に寄付し慶大工学部の基をつくったのが藤原銀次郎です。この藤原銀次郎との交流の一端を、慶太が自著『事業をいかす人』（昭和三十三年、有紀書房）に記していますので、紹介しておきたいと思います。同著一五八頁に

私の顔も、ちかごろなかなかブッソウになってきたそうだ。物騒ではなく、仏相だ。うそではない。決してうそをいわぬ藤原銀次郎さんが、そう認めているのである。（中略）うれしかったので、改めて藤原さんにお礼状を

送った。

とあります。慶太によれば、藤原銀次郎が書いた文章は次のようでした。

五島君の顔でさえ、このごろはすっかり仏相を帯びてきた。（中略）いずれにしても私は大いに感心させられている。慶太は「五島君の顔でさえ」が余計であると笑って、まんざらでもない筆致で書き進めています。銀次郎は慶太より一まわり十三歳年長です。

❷小田急電鉄創業者の利光鶴松にも触れておきます。利光鶴松は慶太より十八歳年上です。晩年病床に臥したとき、小田急のあとを誰に任せるか悩んだあげく慶太に社長就任を懇請しました。戦前、東京西端にある私鉄は国策によって東急電鉄に統合合併をすすめられていわゆる「大東急」（東横、小田急、京急、京王）ができますが、小田急はその前に利光鶴松から禅譲されたものでした。ちなみに利光鶴松の長女静江（伊東静江）は敬虔なクリスチャンとなって大和学園（聖セシリア）を創立しています。修道会ではなく一信者がたてたカトリック学校は聖セシリアが世界にただ一つです。

慶太は「強盗慶太」と異名をたてまつられ、あたかも邪道の手法をつかって他社を乗っ取ったかのように言う人がいて、「大東急」もその結果だと誤解している人がいますが、事情はまったく違いますので、強調しておきたいと思います。

「強盗慶太」に照らして、❸西武鉄道グループの創業者堤康次郎の「ピストル堤」を思いつく人も多いでしょう。二人は、「箱根山戦争」（箱根登山鉄道＝五島と、伊豆箱根鉄道＝堤の伊豆箱根開発の権益をめぐる競争）のこともあって、「強盗慶太」と「ピストル堤」は、よくセットで語られます。

世の大きな話題となった五島慶太の買収のいくつかに触れておきます。「地下鉄王」といえば、❹早川徳次（のりつぐ）です。「東

京地下鉄」という会社を興して、いまの銀座線・浅草新橋間に日本最初の地下鉄を走らせました。その後、「東京高速鉄道」が渋谷新橋間の地下鉄敷設権を得て、慶太を役員に迎えました。そして、慶太の相互乗り入れ提案をめぐり早川徳次と争いが起こりました。慶太は争いを鎮めるには東京地下鉄を買収するしかないと考え、株式の買い付けに取り組みました。東京市が両社を買収合併し帝都高速営団を創ったことで収まりましたが、慶太の株式買付け手法を天下に示しました。なお、「早川徳次」といえばシャープ創業者も早川徳次です。でも読みが違います。シャープは「とくじ」、地下鉄王は「のりつぐ」。地下鉄だけに「のりつぐ」…覚えやすいですね。

また、三越買収騒動と白木屋買収も、慶太の名前とともに語り継がれています。三越は大騒動となり小林一三が「カエルが牛を呑み込むようなものだ。やめておきなさい」と意見したことによって、慶太は潔く身を引きました。しかし白木屋の場合は東急百貨店の都心進出の最後のチャンスと考えて成功させました。慶太はけっして「強盗」ではなく、メリハリのある経済活動を行ったわけです。もっとも、慶太はよく「わたしは強盗慶太と呼ばれているのだが」という枕ことばを笑いながら使いましたので、自分の正当な経済活動に自信をもっていました。

八　五島慶太の胆力が試された事件

慶太は他社買収で世情をにぎわせたわけですが、そのほかでも世間から注目を浴びたことがあります。

昭和九年（一九三四）のことでした。慶太五十二歳のときです。東京市長選挙があり牛塚虎太郎が当選したのですが、牛塚の選挙資金十万円を目蒲電鉄が出したという嫌疑をかけられ慶太が逮捕されるという事件が生じます。釈放まで六ヶ月間勾留され、無罪放免まで三年間被告として裁判にかけられました。「経験者でなければその心境は分か

らない。胆力のある人間でなければ悶死するだろう」と述べるほど辛酸な体験でしたが、慶太らしいエピソードも残しています。一つは、勾留期間に守衛から感服されるほどの存在感を示し、それを知った検事からも、五島さんは偉物ですと言われたといいます。そして二つ目は、臭い飯の勾留生活は読書三昧で、それをもとに釈放後、『ポケット菜根譚』（昭和十五年、実業之日本社）を執筆刊行したことです。これは、慶太がいうように「胆力」がなかったらできないことでしょう。裁判の結果は、第一審＝有罪、第二審＝無罪、大審院（最高裁）＝無罪（上告棄却）でした。

冤罪であったことが証明されたことは一人慶太だけがほっとしたのではありませんでした。数多い人々が喜んでくれたのです。同じ鉄道人の根津嘉一郎（東武）が発起人代表として「雪冤会」という祝賀会を上野精養軒で開いてくれました。「冤罪を雪ぐ会」ということです。ねぎらいに集まった人は三百人を数えました。小田急電鉄の利光鶴松はこのとき五島慶太を信頼する気持ちが弥増し、五年後、七章で述べたように小田急電鉄社長を慶太に禅譲するわけです。

そして、東横電鉄株主総会は慶太の辛酸に対して五万円の感謝慰労金を贈ることを決めました。慶太は自分の会社でもあり、そのようなことはならぬと辞退しましたが、多くの人の強いすすめは弛むことなく、学校設立資金として受領することにしたのでした。東横学園の芽吹きです。

九　東横学園の創立

六章「慶太と学校」において、慶太がみずから創立した東横学園のことは独立した章立てで後述すると書いたわけですが、前章（八）を読んでご理解いただけたと思います。慶太は冤罪を晴らした感謝慰労金に自らの財産七万円をたして十二万円を設立資金として、東横商業女学校を開校しました。昭和十四年（一九三九）のことです。

慶太は開校式式辞のなかで、「健康」「風格」「計数的判断力」「自立」「信仰的生活」の五点が重要であることを述べており、これが現在の各校の建学の精神の基（もとい）となっています。翌年、東横女子商業学校と改称し、戦後、東横学園中学校高等学校（女子校）となり、姉妹校に東横学園大倉山高校を迎え、二十一世紀において東横学園両校を統合し東京都市大学等々力中学校高等学校として東京都市大学グループの一翼をにない今日に至ります。同グループの学校を経営するのは慶太が創設した学校法人五島育英会であることは言うまでもありません。[6]

東横学園の創立に慶太が並々ならぬ思いをかけた象徴を特筆しておきます。それは、

【写真８】東横学園の正門正面
（写真提供：五島育英会）

【写真９】東横学園正門 俯瞰
（写真提供：五島育英会）

紀州徳川家下屋敷の門を譲り受けて学校正門として据えたことです（【写真8、9】）。昭和四十年代まで学校の象徴として生徒たちが仰ぎ見、くぐって登校していました。

一〇　五島慶太は没後どのように評価されたか

本稿もだんだん結びの章に近づいてきました。ここを生前の慶太と別れる章としたいと思います。五島慶太という人物を世の中はどのように見ていたのでしょうか。禅語に「棺を蓋いて事定まる」というものがあります。棺は遺体が入れられるひつぎ。人間というものは棺に蓋をされたあと、すなわち亡くなって初めて真の評価が定まるものだという意味です。生きている間はお世辞を言ったりする者もいるので当てにならぬということです。そういう見方から慶太の死を見つめてみたいと思います。

以下、四つの視点から、慶太の評価をさぐりたいと思います。

❶　新聞報道

昭和三十四年（一九五九）、学校も夏休みたけなわの八月中旬、読売新聞を手にしたある小学生は、一段見出しに踊る活字にびっくりしました。「巨星墜つ」。慶太が八月十四日に逝去したことを伝える読売新聞夕刊でした。こんな表現に価する人ってどんな人だろうか。その少年はそれから慶太を追いかける人生を送るようになりました。

❷　弔電

慶太の訃報に対して、数えきれない弔電が寄せられましたが、中に「世界がさびしくなりました」と打たれたものがありました。このような表現をされる人は、そうざらにはいないと思います。

❸ 戒名

慶太の戒名は「明徳院殿慶愛天道剛徹毅翁大居士」といいます。戒名は導師をつとめる菩提寺住職が生前の故人を偲んでつけてくれるものです。九品仏浄真寺の住職ははじめ「明徳院殿慶天道剛徹毅翁大居士」と付けました。先に示した戒名との違いが分かるでしょうか。六文字目に「愛」の言葉があるかないかです。住職から示された戒名をみて、とても立派な戒名で申しぶんないように思うが、何か物足りない。会長（慶太翁のこと）は「強いばかりでなく、やさしく温かい人だったんだ」それを表現する言葉が欲しいという願いが寄せられて、「愛」の一文字が入れられたということです（『五島慶太の追想』四八二頁、浦川陸臣元小田急専務理事の追想）。慶太は泉下（せんか）でくすぐったがっているのではないかと思います。慶太の生前をほうふつとさせる話です。

❹ ロンドン・タイムズ

イギリスのタイムズという世界最古の新聞があります。ニューヨークタイムズなどと区別するために「ロンドン・タイムズ」と呼ばれもしますが、世界で最も有名な新聞です。そのタイムズが「世界を代表する百人」という特集を組みました。慶太が亡くなった昭和三十四年（一九五九）八月の号です。日本からはただ一人、なんと五島慶太が選ばれて掲載されたのでした。これ以上の評価はないと言えるでしょう。

（一）五島慶太の胸像：八基

六章「慶太と学校」において北見工業大学が国立大学なのに慶太の胸像を飾って慶太を顕彰していること、また今は都市大グループの一校となっている東京都市大学塩尻高校に慶太の胸像がある事情などについて紹介しました。いずれも深く納得できるところです。ほかにも、慶太の胸像は全国に合わせて八基あります。いずれも自分が望んだも

のではありません。以下、列挙します。

一．東急株式会社（本社）

二．五島育英会設置校　三基

（一）東京都市大学世田谷キャンパス 五島記念館中庭

（二）東京都市大学等々力中学校・高等学校 正面玄関脇

（三）東京都市大学塩尻高等学校 正面玄関

三．北見工業大学 キャンパス内（北海道北見市公園町）

【写真10】東京都市大学等々力中学校高等学校の胸像

四．聖一国師堂（静岡県静岡市清水区馬走北／静岡鉄道株式会社建立）

五．青木村殿戸区公民館（長野県小県郡青木村）

六．東横神社[7]境内（神奈川県横浜市港北区大倉山）

（二）五島慶太未来創造館（長野県小県郡青木村）

慶太の生地は、七章「五島慶太のおいたち」の冒頭「少年慶太を育んだ人々」のところに記しましたように、長野県小県郡青木村殿戸です。最近まで生家が当時のままに残っていました。お隣の方が自分の所有にしてくださって、郷土の偉人の生家として保存してきてくださったのでした。ところが、その篤志を踏みにじるかのように、平成三十年（二〇一八）八月十四日に落雷により、ほぼ全焼してしまいました。いくらか焼け残りがありましたが、再建するのは無理でした。不可抗力とはいえ、これが運命だとしたら運命は時に残酷です。でもまた、捨てる神あれば拾う神ありで、不幸中の幸いだったのは、東京都市大学の勝又英明教授（当時。現在は名誉教授）により、生家が実測され、

それに基づいて縮小模型が制作されていたことです。この模型は東京都市大学世田谷キャンパス五島記念館に展示されていますが、この模型をたよりに、慶太を顕彰する事業が立ち上がりました。

慶太の生地、長野県小県郡青木村は、以前から、村の誇るべき偉人として五島慶太頌徳碑公園などを東急グループと協力して整備していました。生家の落雷焼失を機に、再び青木村と東急グループが力を合わせて、五島慶太の事績を記念するプロジェクトが発足しました。このプロジェクトは、北村政夫村長の、過去を振り返るだけでなく五島慶太翁の思いを未来に生きる人々のためにつなげたいという思いをコンセプトにして進められ、令和二年（二〇二〇）四月十八日、慶太生誕の日に合わせてオープンしたのが、「五島慶太未来創造館」です。電車の本物の動輪が展示されており、VR（バーチャルリアリティ）技術も駆使して慶太の生家が体験できるなど、現実と仮想とを織り交ぜた斬新な施設となっています。慶太が大切にした「延命会」の精神、我々は過去を学ぶことによって、命を悠久の太古にも延ばすことができるという延命会の精神、そしてそれによって未来を創造する力を身につけるという精神にあふれた施設です。冥界で慶太が深い感謝にむせぶ姿が想像できるようです。[8]

【写真11】生家の復元模型
（写真提供：学校法人五島育英会・東京都市大学）

【写真12】五島慶太未来創造館
（長野県青木村ホームページより）

（三）東京都市大学世田谷キャンパス　五島記念館　歴史展示コーナー

ほかに慶太を顕彰する施設は東京都市大学にもあります。ここに展示されているのは、次のようなものです。

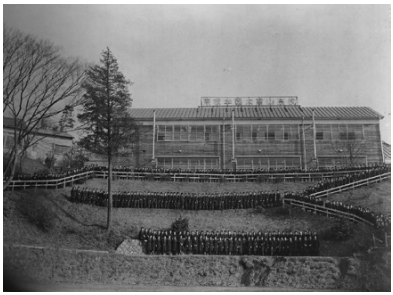
・慶太生家の復元模型、
・慶太の遺品、
・五島慶太翁生誕一三〇年記念誌『熱誠』
・「五島慶太伝」
・その他

おわりに

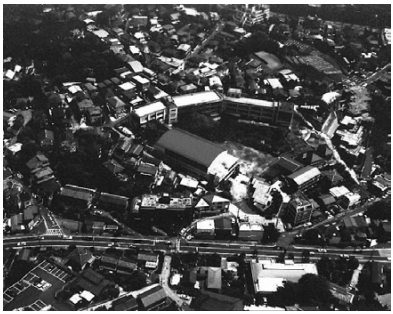
さて、本誌を編んでいるのが「大倉精神文化研究所」であることにちなみ、同研究所から東横線大倉山駅を挟んだ向こうの丘に「赤い屋根の学校」があったことに触れて本稿を結びたいと思います。その沿革は次の通りです。

昭和十五年（一九四〇）　大倉山女学校として創立（創立者＝高野平）
昭和三十年（一九五五）　東横学園大倉山高等学校となる（学校法人五島育英会＝五島慶太理事長）
平成二十年（二〇〇八）　世田谷区等々力の東横学園高等学校と統合。
平成二十二年（二〇一〇）　東京都市大学等々力中学校・高等学校と改称。

東横学園大倉山高校としてはおおよそ五十年。大倉山女学校から数えて約六十五年。綱島街道から見上げる丘の上にたっていました。木造校舎時代は赤い瓦ぶき。鉄筋コンクリート造になってからは体育館が赤いスレート葺きでし



【写真13】東横学園大倉山高校　木造校舎時代



【写真14】東横学園大倉山高校　鉄筋コンクリート時代

たから、一貫して「赤い屋根の学校」でした。東海道新幹線ができてからは、その車窓からもながめることができた赤い屋根でした。六千二百八十三人の卒業生を世に送り出しました。慶太は高野平から経営を引き受けたあとも、高野平の思いを汲み取って、教壇に立ってもらいました。

また、高野平のお嬢さんが横浜大空襲に遭った体験を「横浜の空襲と戦災 体験記録」（横浜市編集）に寄せられており、父親の思い出についても綴っています。

東横学園大倉山高校で生徒がどのような日々を送っていたかについて、校長日記「嗚呼大倉山五十年」を今も継続していますので、ご覧になれます。

（編者付記）本稿は、令和四年（二〇二二）五月二十一日の大倉山講演会における「鉄道王・教育者の五島慶太を通してみる『人と人生』」（横浜市大倉山記念館ホール）と題する講演内容に、加筆修正を加えて成稿したものである。

【協力】東急株式会社「社長室広報グループ」・学校法人五島育英会（東京都市大学グループ）

【主な参考資料】
・五島慶太「私の履歴書」（『私の履歴書 第一集』〔日本経済新聞社、一九五七年〕収録）
・公益財団法人阪急文化財団ＨＰ「一三ネットワークの１００人―経済」（http://www.hankyu-bunka.or.jp/ichizo/network100/economics/）
・長尾資料館「わかもと物語　欽弥とよねの〝夢の宴〟」（http://nagao-bekkan.image.coocan.jp/index.html）
・五島慶太翁生誕一三〇年記念誌編纂委員会編『熱誠』（五島育英会、二〇一三年）
・五島慶太翁生誕一三〇年記念誌編纂委員会編『五島慶太伝』（五島育英会、二〇一四年）

注

（1）「延命会」荻野仲三郎（美術史）と鈴木大拙（仏教思想家）を囲む会として発足した。会員は石井光雄・小林一三・畠山一清・松永安左エ門・関屋貞三郎・五島慶太・服部玄三・長尾欽弥・川喜田久太夫・石坂泰三・篠原三千郎・田邊加多丸・野口信二（以上、阪急財団「茶道 一三ネットワークの百人」と「長尾資料館」の資料から）。

（2）三題噺とは、縁もゆかりもないと思われる三つの言葉（お題）を無理やり結び付けて一つの話にまとめ上げること。江戸時代の寄席落語で、客に適当に言ってもらった三語を落語にまとめあげることから始まったと言われている。古典落語、人情話の「芝浜」もそうやって生まれたという。

（3）大倉精神文化研究所「横浜市港北地域の研究」シリーズわがまち港北・第五十五回「日吉の宅地化と慶應義塾キャンパス」より・初出は、横浜市港北区役所総務部地域振興課区民活動支援センター発行の情報紙『楽・遊・学』に第四十六号（平成十一年一月一日号）より連載の「シリーズ　わがまち港北」）

（4）慶太は晩年、自分はアインシュタインと誕生日が同じだと言っていた。でも、それはアインシュタインの没日を勘違いしたものだ。アインシュタインが亡くなったのは一九五五年（和暦では昭和三十年）四月十八日。慶太の誕生日に昇天している。

慶太逝去の四年前のことで、そう昔のことではないので、没日と誕生日を取り違えるはずはないと思うのだが、慶太ほどの人でも勘違いはあるのだと思って、筆者にはすこしほっとするエピソード。

ちなみに、慶太の没年月日は、一九五九（昭和三十四）八月十四日。奇しくも数字が四一八と八一四というように、誕生日とひっくり返した形だ。トリビアついでに、もうひとつ。アインシュタインは一八七九年三月十四日の生まれで、慶太より三年早くこの世に誕生した。アインシュタインの誕生日十四日の数字に合わせて十四日に慶太はこの世を去った。

（5）東京帝国大学同期生には後に燦燦と輝く人物が多い。重光葵（外相）・芦田均（第四十七代首相）・正力松太郎（読売新聞社主、プロ野球巨人軍オーナー）・石坂泰三（財界総理と呼ばれた経団連会長）・小笠原三九郎（蔵相）・木村篤太郎（法学博士、日本剣道連盟会長）・三宅正太郎（裁判官、大審院部長）・河上弘一（日本輸出入銀行総裁、『貧乏物語』河上肇の従弟）・篠原三千郎（慶太の親友、東急電鉄の大番頭）・牧野良三（法学博士、法相）。

（6）慶太は武蔵工業大学を引き受けたときに、創立者西村有作や及川恒忠らの創立にかけた思いを大切にして建学の精神はそのままにした。そのため武蔵工業大学系の学校の建学の精神は東京都市大学グループとなった今も変わらないままだ。「公正、自治、自治」という。

（7）東横神社は、昭和十四年六月二十二日に天照大神を主祭神として渋沢栄一はじめ四十四柱を祀ることで創建された。そして慶太の願いで東急従業員で現職のまま亡くなった方々の名が境内に刻まれている。

（8）「五島慶太未来創造館」紹介動画のアドレスは「https://youtu.be/IFfXDL_Fopw」。